

[明清の美術展によせて]

不忍池図をめぐって

—日本と中国の絵画空間表現—

小田野直武(1749—80年)筆「不忍池図」は、江戸時代後期の秋田蘭画の代表的作品として著名な存在です。図は、前景に芍薬の鉢植えを置き、背景に江戸の名所上野不忍池が対比された、いわゆる花卉山水図で、入念な筆致で制作され高い完成度を見せています。この絵には西洋画法に倣った陰影法と透視遠近法が適用されており、江戸時代絵画の記念碑的作品であり、当時の人々に新鮮な驚きを与えたことは想像に難くありません。

図ははっきり前景と背景に分かれ、それぞれの描法は大きく異なっています。前景は南蘋派の克明な描法により、濃彩が点じられた花は生々しきすら感じさせます。一方、背景の不忍池の景観は舶載銅版画に触発された細かな描線主体の淡彩画です。一種の空気遠近法が用いられた結果、前景は鮮明に描き、背景はぼかしてあると考えられます。そしてこの絵のポイントである透視遠近法も目立った破綻はありません。けれども前景と背景は融合しているとはいえ

せん。まるで舞台の書割りの前に鉢植えが置かれているようです。

この前景と背景が異なった描法で描かれていることは注目すべき点です。それは一つの画の中でモチーフによって、画法を使い分けるのは中国画や日本絵画の伝統的なやり方であるということです。たとえば山水画でも山水や樹石は水墨で描き、人物や楼閣には彩色するというのはごく一般的ですし、その場合、水墨と著色という色彩の違いだけでなく、描線の疎密も異なってきます。このようなモチーフをその最も適した描法によって描き分けることは、中国では水墨画が定着し、絵画の表現技法が多様化した唐宋五代から宋代には絵画の基本となっています。

小田野直武は秋田角館の藩士で、武人画家の常として彼も最初に狩野派を学び、その画からも狩野の画法が基本となっていることは明らかです。狩野派は室町水墨画を継承し発展した画派で、その源泉は鎌倉・室町時代に日本に請来された中国画、いわゆる宋元画にあ

ります。狩野派はいわば中国絵画という大河から分かれ出た支流の一つであり、中国絵画を日本風に発展させたものといえます。

直武が狩野派に学んだことを思うと、前景を南蘋風に、一方背景を銅版画風に描いて一つの図に仕上げたことは不思議ではなくなります。この図は新しい写実的な要素が入った図なのですが、それは部分的で表面的なものに過ぎず、その根本的な絵画制作の原理は古い伝統から脱していないのです。

背景である不忍池の景色は先に述べたように前景に比べ格段に淡く描かれています。エッチング風に細部まで詳しく描き込まれています。これは遠近表現としてはおかしく、遠くの物は不明瞭に描かなくてはならないはずですが、また背景は一律に色が薄く、変化がありません。江戸の洋風画家たちが参考とした銅版画には近景から遠景まで連続した景観が描かれています。その中から遠景のみを抜出してそれを手本に不忍池を作っています。また直武らの秋田蘭画は粉本による制作が多く、この不忍池もおそらく彼の写生ではなく先行作品の図柄を利用しているのでしょうか。直武他の作品も既存の図様を組合わせて構成されたと推測される絵が多く、粉本に則って制作を行なう狩野派の方法が

踏襲されています。

つまり、直武の不忍池図は結果として実在感と非日常的な幻想性を兼ね備えた作品となっているけれども、その枠組みは狩野派に代表される当時の絵画からはみ出してはならず、絵から絵へ再構成した図であり、前景と背景の画面上での合成という点で日本的な絵画であるといえましょう。

ここで「東洋的」という言葉を使わず「日本的」と表現したのには理由があります。それは日本と中国の絵画の空間表現は同じではないということです。大まかにいうと、写実主義を原則とする中国絵画は三次元の空間を絵画という平面に再現することを意識しているけれども、日本絵画は同じ画材を用い、同様の画題を描きながらも空間の奥行や広がりに対する関心が低く平面的であるということです。これは彼我の絵画の優劣という問題ではなく、絵画の性質の違いであり、文化の相違から来るものと考えた方がよさそうです。

伝李成筆「喬松平遠図」は北宋期の山水図の遺品です。近景に双松を置き、その後ろに黄土平原が広がって遥かに遠山を望む図は、一見すると直武の図に近似しています。しかしその空間の表現はまったく異なります。ここでは近景から背景まで連続した空間が圧縮され、「咫尺に千里を掃く」と評された李成の卓越した平遠法がどのようなものであったかを見ることが出来ます。おそらく直武もこの様な統一感のある遠近表現を行ないたかったのではないかと想像されますが、日本にはこうした北宋山水画の空間表現の伝統は受け継がれず、このような山水画を彼が目にする事もなく、その空間の異なるので水と油のように描法の異なった前景と背景が素朴に併置された図を描いたのでしょう。それは直武という画家個人あるいは秋田蘭画という画派に原因があるのではなく、日本絵画が三次元的な空間を構築することに関心が薄かったという歴史に起因すると考えられるのです。(藤田伸也)

不忍池図 小田野直武筆 秋田県立博物館蔵



喬松平遠図 伝李成筆 澄懷堂美術館蔵

